

「アートミックサンシャインの中へ in 沖縄 日本国平和憲法第九条下における戦後美術」展が開催中だ。随分長いタイトルなので、短く「憲法九条下における戦後美術」沖縄版と略してもよさそうだが、そうはいかない。「アートミックサンシャインの中へ」の個所が企画展の重要な出発点であり、敗戦後の憲法改正会議を指すようである。

某書によると、GHQ最高司令官II・マッカーサーは着任後の憲法改定の草案作りから、退任するまで(一九五一年)、昭和天皇



おきなわ美術コラム

視線

上原 誠勇

と十一回に及ぶ会見をし、天皇の戦争責任と擁護、地位、戦争放棄、防衛、日本国家のあり方など、さまざまな問題を含む会話が交わされたという。

四回目の会見は、沖縄にとって「差別」と「屈辱」を味わう悲劇的な話が交わされる。天皇は将来の日本の安全保障問題に触れながら、沖縄の米軍統治(占領)は「二五―五十年、あるいはそれ以上にわたる貸与」という「天皇メッセージ」を発したのである。「昭和の沖縄処分」とも言える「国防の質草」のような処分(?)である。

米軍統治二十七年、日本へ再併合(復帰)して三十七年、巨大化する米軍基地と自衛隊基地。沖縄現状の布石の原点がそこにある。

戦闘機や軍艦が常に戦闘

県内美術界に「春の嵐」

モードにスタンバイし、戦後が終わらない沖縄で企画された本展の「in」の意味は大きい。会場を二回りする「平和憲法」の第九条もなんだか空ぞらしい。

この極めて政治的、歴史的なテーマを立ち上げ、県立博物館・美術館に持ち込んだのは、海外で活躍する若いインディペンデント・キュレーターの渡辺真也氏である。近年あまり見られないハードコア企画だけに沖縄美術界にとって収穫は大きい。二〇〇八年一月にニューヨーク、八月東京と巡回し、沖縄にやってきた。東京のスマートな展示内容に比べ、一段と深化(進化)し「場の力」で企画趣旨の軸心が揺さぶられ、確かなリアリティーを獲得した展示会になった。

のゲートに入り、オノ・ヨーコ作品の「ホワイト・チェス・セット」から仲里安広作品のフェンスの作品に視線を通過させ、奥の作品「key Stone」を見る。果てはなく戦争を続ける米国と、非戦非軍備を米国に奨励された日本、構図が重なりこっけいに写る。まるで平和憲法をあざ笑うかのようである。沖縄美術界に「春の嵐」を呼び込むすばらしい企画展となった。残念なのは、NYと東京展に展示された、本企画展の出発点ともなる大浦信行作品「遠近を抱えて」が一点の展示もなく、また同名の映画上映も至らなかつたことである。キュレーターの企画内容の責任性と、公美術館の展示作品検閲は、解決されるべき問題として課題を残した。(画師沖縄主宰)